様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １６ 日現在

機関番号：３２７０２
研究種目：挑戦的研究（開拓）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ１８１１９

研究課題名（和文）ポルト南蛮屏風の総合的研究による新領域の開拓

研究課題名（英文）Pioneering New Domains Through Comprehensive Research Study of Porto Namban Byobu Folding Screens

研究代表者
関口　博巨（Sekiguchi, Hiroo）

神奈川大学・国際日本学部・教授

研究者番号：６０４６０１２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　16,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、ソアレス・ドス・レイス国立博物館（ポルトガル・ポルト市）が所蔵する南蛮屏風（以下、ポルト南蛮屏風）を主たる対象として、日本から海外に持ち出された屏風（在外日本屏風）総体を総合的・資料学的に研究する方法を確立することにある。屏風や襖は、絵画・骨・裂・古文書（下張り文書）からなるいわば「複合資料」である。本研究は、歴史学・美術史学・建築史学・民具学・文化人類学・キリスト教史学・情報学などの学知や古文書修復などの経験知を総合して、ポルト南蛮屏風の国際的・学際的な研究に取り組もうとするものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
海外に持ち出された屏風・襖の総合的研究は、文物の移動や人びとの交流に関する歴史の新たな一面を解き明かす可能性を秘めている。ポルト南蛮屏風以外にも在外日本屏風の存在は知られており、本研究の進展は、日本とポルトガルだけでなく、日本と世界の複雑な交流史・関係史に新たな光をあてる新領域の開拓に繋がる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to establish a method for comprehensive, material science research of the folding screens taken overseas from Japan (overseas Japanese folding screens) as a whole, focusing primarily on the Nanban folding screens in the collection of the Soares dos Reis National Museum in Porto, Portugal (hereafter referred to as Porto Nanban folding screens). Folding screens and sliding doors are, so to speak, "composite materials" consisting of paintings, frames, cracks, and extremely old documents (underlying documents). This study aims to undertake an international, interdisciplinary study of the Porto Nanban folding screens, integrating academic knowledge from history, art history, architectural history, folk tools, cultural anthropology, Christian history, information science, and other fields, as well as experiential knowledge regarding the restoration of extremely old documents.

研究分野：日本近世史

キーワード：南蛮屏風　下張り文書　ポルト　エヴォラ　常民

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

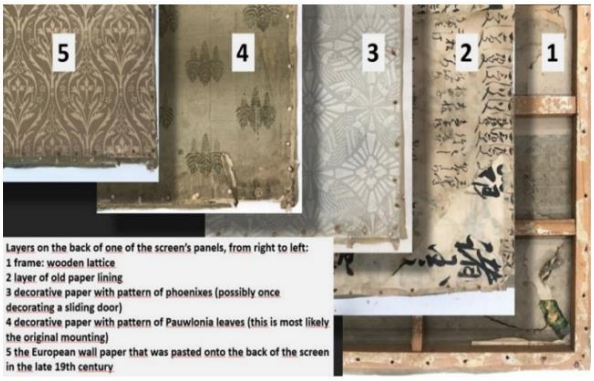
本研究は、ソアレス・ドス・レイス国立博物館（Museu Nacional Soares dos Reis、ポルトガル・ポルト市）が所蔵する南蛮屏風（以下、ポルト南蛮屏風と略称。図１はその一部：Biombos Namban より）とその下張り文書について、デジタルデータの作成と目録の整備をすすめ、あわせて学際的な研究によって日本・ポルトガル関係史に新たな視野を開くことを目的とした。この研究を通して、さらに在外日本史資料を発掘し､研究資料とする方法的･技術的な基礎を確立することをめざした。

図１　「ポルト南蛮屏風」の一部

一般に、屏風や襖は、日本家屋の仕切り・風除けの機能と装飾性とをあわせもった家具・調度品である。とくに屏風は、家屋の構造とかかわりなく設置することができ、折りたたんで収納し運搬することもできることから、近世初期以降、ポルトガル人やオランダ人の手に渡り、ヨーロッパ諸国に多数が持ち出された。ポルト南蛮屏風は、その典型的な例にほかならない。

ポルト南蛮屏風の屏風絵（六曲一双）は、17 世紀初頭の狩野派絵師の手に成る作品と推測され、日本においても九州国立博物館が特別展示するなど、その芸術的・資料的価値は高く評価されている。しかし屏風や襖は絵画だけで成り立つものではない。屏風・襖の内部構造は、図２（オランダ国立民族学博物館ＨＰより）にみえるように、表層の屏風絵や襖絵は骨と呼ばれる木製の枠組みに、何重にも糊付けして巻き付けられた下張り文書を支持体として成り立っている。下張り文書は、おもに反故紙であり、旧蔵者にとっては廃棄物にすぎないが、後世の私たちにとっては貴重な歴史の痕跡である。屏風・襖は、絵画・骨・裂（きれ）・古文書からなるいわば「複合資料」であり（関口 2015)、海外に持ち出された屏風・襖の総体（表と裏）の総合的研究は、文物の移動や人びとの交流に関する歴史の新たな一面を解き明かす可能性を秘めていた。

図２　屏風の内部構造



２．研究の目的

本研究は、歴史学・美術史学・建築史学・民具学・文化人類学・キリスト教史学などの学知、古文書修復などの経験知を総合して、ポルト南蛮屏風を多角的に検討することを目的として始まった。

研究代表者は、予備調査のため 2020 年１月にソアレス・ドス・レイス国立博物館を訪ね、ポルト南蛮屏風が南蛮交易や日本・ポルトガルの文化的交流の様子を活写したすぐれた作品であり、近世初期の風俗資料としても重要なものであることを確認した。ポルト南蛮屏風の研究は、1902 年に発見されたリスボン国立図書館所蔵のエヴォラ屏風文書（16 世紀末）の研究や他の在外日本資料の研究についての見通しを開き得るものと期待された。

海外に伝わる屏風・襖の来歴（制作、修理、所蔵者の変遷、モノの移動など）の解明は、日本とポルトガルだけでなく、オランダをはじめとする日本と世界との複雑な交流史・関係史を新しい視座から見直すことを可能とするだろう。そのための確実な足掛かりを構築することが本研究のもうひとつの目的であった。

本研究組織の参加者は、これまで海外研究者と積極的に交流をはかり、共同研究の国際的ネットワークを構築してきた。なお、連携研究者および研究協力者としてダン・コック（オランダ）など３ヵ国 10 数名におよぶ国内外の研究者がこれに加わる予定であった。

３．研究の方法

1）下張り文書データベースの構築と研究

ポルト南蛮屏風は、2000 年から 2002 年にかけて、屏風絵部分が東京文化財研究所で修復さ

図３　ポルト南蛮屏風下張り文書

れ、ソアレス・ドス・レイス国立博物館の「看板」のひとつとして常設展示されている。その修復の際に取り外された下張り文書の多くは、現状では、図３（撮影は筆者）のようなシート状の塊りのまま、同博物館の収蔵庫に保管されている。これらを剥離すると約 2000 枚に及ぶ古文書群になるものと推測される。この下張り文書が近世京都の菓子屋「菱屋」の古文書であり、金平糖などの菓子の販売や砂糖の流通、家の歴史や系譜に関する史料を含んでいることなど、その概要は、すでに予備調査の段階で把握している。本研究では、研究代表者を中心に、修復家の山口智史の協力のもと、これらを可能な限り剥離し、デジタル化、翻刻、目録化をすすめ、世界の研究者が共有できる資料データベースを構築する予定であった。

2）ポルト南蛮屏風の来歴の調査と研究

また、研究協力者のパウラ・オリベイラ（ソアレス・ドス・レイス国立博物館学芸員）によると、ポルト南蛮屏風は 1950 年代に駐日ポルトガル大使が京都で購入したものという。購入に関する文書が一部保存されていることから、日本とポルトガルの架け橋ともいえる貴重な文化財が海を渡った経緯について、同博物館と共同で詳しく検討していく必要があった。その来歴の調査と研究は研究分担者の泉水英計がパウラ・オリベイラとともに担当する予定であった。

３）在外日本資料の調査

海を渡った屏風・襖などの資料（在外日本資料）は、ポルト南蛮屏風以外にも多く残されている。ポルト南蛮屏風の資料化の試みは、20 世紀初頭にポルトガルのエヴォラで発見された下張り文書やリスボンにある屏風、オランダに渡った屏風にも応用できる。研究分担者の久留島典子・岡美穂子を中心に、在外日本資料の所在確認を行い、キリシタン史との関連や下張りの紙の素材分析などの調査と研究にあたる予定であった。

４）美術史的研究

ポルト南蛮屏風は、2000 年から 2002 年にかけて、絵画部分が東京文化財研究所で修復され、九州国立博物館が開催した特別展で展示された。そのときの研究成果に基づき、ポルト南蛮屏風と他の南蛮屏風とを比較する美術史的研究をさらに進める予定であった。

５）民具学的研究（絵引きの作成）

ポルト南蛮屏風には近世初期の長崎の町の様子が詳細に描かれている。研究分担者の昆政明を中心に、ポルト以外の南蛮屏風も含めて、屏風に描かれた道具や人びとのしぐさを分類し、絵で引く辞書（絵引き）を作成してデータベース化する予定であった。

６）情報学的研究

屏風・襖の骨に付着した古裂の分析や解体・修復不要の屏風・襖の調査・研究については、研究分担者の吉澤達也と森脇優紀を中心として情報学的観点からの研究に取り組む予定であった。

４．研究成果

本研究の目的は、ソアレス・ドス・レイス国立博物館（ポルトガル・ポルト市）が所蔵する南蛮屏風（以下、ポルト南蛮屏風）を主たる対象として、日本から海外に持ち出された屏風（在外日本屏風）総体を総合的・資料学的に研究する方法を確立することにあった。屏風や襖は、絵画・骨・裂・古文書（下張り文書）からなるいわば「複合資料」である。本研究は、歴史学・美術史学・建築史学・民具学・文化人類学・キリスト教史学・情報学などの学知や古文書修復などの経験知を総合して、ポルト南蛮屏風の国際的・学際的な研究に取り組もうとしたものであった。

海外に持ち出された屏風・襖の総合的研究は、文物の移動や人びとの交流に関する歴史の新たな一面を解き明かす可能性を秘めていた。ポルト南蛮屏風以外にも在外日本屏風の存在は知られており、本研究の進展は、日本とポルトガルだけでなく、日本と世界の複雑な交流史・関係史に新たな光をあてる新領域の開拓に繋がるものと考えていた。

研究費の交付期間中は、研究実施計画の６本の柱〈１.下張り文書データベースの構築と研究、２.ポルト南蛮屏風の来歴の調査と研究、３.在外日本資料の調査、４.美術史的研究、５.民具学的研究（絵引きの作成）、６.情報学的研究〉を推進すべき時期であったが、コロナ禍の影響を受けた令和 3～4 年の状況を転換することができず、ソアレス・ドス・レイス国立博物館との協定を取り結ぶことができなかった。そのため、国外調査はもとより国内調査を実施することもできなかった。

＜引用文献＞

① 関口博巨、モノとしての古文書と民具：複合資料論の試み、日本歴史、第 801 号、2015、35-37

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 岡美穂子
２．発表標題 16・17世紀の日本における 政治的贈答品としての南蛮料理 ー日本の味覚革命と“南蛮”
３．学会等名 歴史学会大会シンポジウム
４．発表年 2021年

１．発表者名 Mihoko Oka
２．発表標題 “The Namban Trade and the Slavery in the East Asia.”
３．学会等名 EWHA Womans University, Department of History, Korea（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計1件

１．著者名 Mihoko Oka (ed.)	４．発行年 2022年
２．出版社 Palgrave Macmillan	５．総ページ数 295
３．書名 War and Trade in Maritime East Asia (Palgrave Studies in Comparative Global History)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	昆　政明 (Kon Masaaki) (10747182)	神奈川大学・国際日本学部・教授 (32702)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	泉水　英計 (Sensui Hidekazu) (20409973)	神奈川大学・経営学部・教授 (32702)	
研究分担者	岡　美穂子 (Oka Mihoko) (30361653)	東京大学・大学院情報学環・学際情報学府・准教授 (12601)	
研究分担者	久留島　典子 (Kurushima Noriko) (70143534)	神奈川大学・国際日本学部・教授 (32702)	
研究分担者	吉澤　達也 (Yoshizawa Tatsuya) (90267724)	神奈川大学・人間科学部・教授 (32702)	
研究分担者	森脇　優紀 (Moriwaki Yoki) (90733460)	東京大学・大学院経済学研究科（経済学部）・特任助教 (12601)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関